

# しろあとだより

第 11 号

2015 年 10 月

高槻市立  
しろあと歴史館

## 高槻工兵隊に移築された大阪城の「元御金蔵」について

千田 康治

### はじめに

現在、大阪城内の天守閣南東に現存する重要文化財・金蔵の説明板には、次のように記されている。『江戸時代、幕府の金貨、銀貨を保管した建物で、幕府直営の金庫としての役割を果たした。(中略)宝暦元年(1751)、この場所から南に延びていた長屋状の建物を切断・改造して築造され、以来、北西側に以前からあった金蔵を「元御金蔵(もとごきんぞう)」、この金蔵を「新御金蔵(しんごきんぞう)」と呼んだ。(中略)なお元御金蔵は、明治25年(1892)、配水池建設にもなつて今の金蔵の東隣に移築され、さらに昭和4年(1929)、陸軍によって高槻工兵隊の敷地内に解体移築され、のちに焼失した。』この元御金蔵の高槻移築後については、その詳細が知られていなかった。本稿では、高槻移築の経緯やその後について紹介したい。

### 一 建設から移築まで

元御金蔵の建設時期は、江戸幕府三代将軍の徳川家光の治世下、大坂城本丸の築造が進められていた寛永二年(一六二五)か、その翌年頃と推定されている。場所は、現在天守閣の東にある大手前配水池の南の縁にあたり、東西に長い造りで建っていた。慶応四年(一八六八)に発生した鳥羽伏見の戦い後の大坂城大火にも焼けずに残ったが、明治二十五年(一八九二)に配水池の建設にともない移築された。前記説明板のとおりである(1)。

国立国会図書館が所蔵する承応・明暦(一六五二〜五八)頃に作成された

### 目次

「高槻工兵隊に移築された大阪城の「元御金蔵」について」	千田康治	1
「高槻藩士小倉家の昇進について」 芦原義行	.....	5
「史料紹介「高槻町役場新庁舎完成記念宣伝ビラ」について」	.....	9
「宣伝ビラから読み取る「大高槻町」時代の高槻」 中村雄一	.....	9

とみられる「大坂城御絵図」(図1)には、柱間が東西方向に九間、南北に三間あり、天守閣側の北向きに出入り口が設けられた元御金蔵が描かれている。寛政五年(一七九三)に描かれた「大坂城絵図」(大阪城天守閣蔵には、元御金蔵と新御金蔵が共に描かれている(新御金蔵は柱間が東西方向に三間、南北に八間)。昭和三十四年から三十六年(一九五九〜六一)に新御金蔵を解体修理した際、東隣に明治二十五年に移設された元御金蔵の基礎部分が検出された(2)。それによれば、長辺が一九・六五m、短辺が七・九mであった。新御金蔵は短辺が七・三八m(建築部分では六・四七m)で、長辺については記載がない。この数値や図面から比較すると、ほぼ同規模で、元御金蔵のほうが若干大きかったことがわかる(3)。

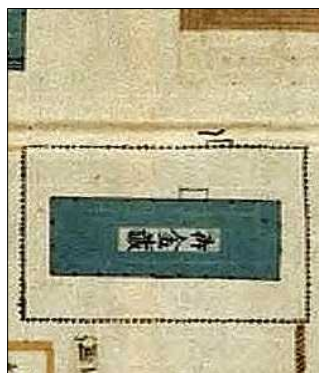
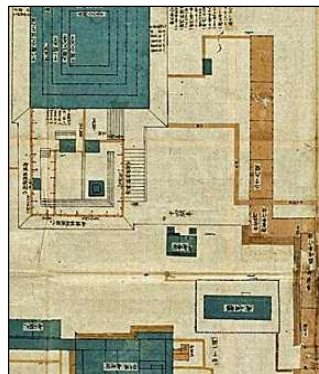


図1 「大坂城御絵図」に描かれた本丸の元御金蔵部分(上図の右下)と、その拡大(下図)。

昭和四年(一九二九)、元御金蔵は陸軍によって解体された。前年に昭和天皇即位の記念事業(昭和御大典記念事業)として、天守閣復興を含む大阪城公園の整備事業がはじまった。その一環として、元御金蔵の南隣の位置に陸軍第四師団司令部庁舎が新築されることになり、建設工事が昭和四年からはじまっている。そして元御金蔵跡地には陸軍によってコンクリート造りの車庫が建てられた(4)。この経緯から、司令部庁舎やその関連施設の建設に伴って立ち退く必要から、元御金蔵は解体されたとみられる。

## 二 高槻への移築

昭和五年（一九三〇）三月二十五日付の大阪朝日新聞に、次の様な記事が掲載された。

『高槻工兵隊の武道場落成』 高槻工兵隊では大阪城内にあった有名な豊臣氏時代の御金蔵を譲り受け、これを材料としてかねて同隊内将校集



図2 昭和31年頃の航空写真(部分)。手前が北側。筆者が上方の一部に重なっていた別の写真を消し、建物名等を加筆した。丸で囲んだ部分が武道場。

会所前に武道場を建築中のところ今回落成し、二十三日の創立記念祭に竣工披露を兼ねて同場内で創立記念の祝宴を行った。全体の様式は大阪城内の時と同型で、たゞ間口が少し長くなったが、屋根は荘重な本瓦葺で全体に奥床しさが溢れ、殊に天井の梁は檜の巨木そのまゝを使って昔の豪奢を思ひ出させるに十分である。この記事から、元御金蔵が高槻工兵隊の敷地へ移築された時期が確定できた。

高槻工兵隊は当時、工兵第四大隊と称し、大阪城に司令部を構えた第四師団に属する部隊であった。日露戦争後の常設師団増加による改編により、明治四十二年（一九〇九）三月に伏見（京都府）から高槻に移転し、高槻城跡を拠点とした。敷地の西半分は練兵場等であった。そして道路をはさんだ東半分は、北側に装備の倉庫、中央部は広場、南側に兵舎が配置され、南西部（兵舎の西隣）の南側に陸軍病院、北側に将校集会所と庭園があった。また、武道場は将校集会所の北側に建てられた。図2は、戦後の昭和三十一年（一九五六）頃に撮影された、高槻市立第一中学校（手前側）や大阪外国語大学（奥側）の航空写真である(5)。両校は、高槻工兵隊の敷地・施設を利用しており、工兵隊時代の旧状がよく残っている。

図3は、戦後の昭和四十年（一九六五）に作られた略図(部分)である(詳細は後述)。南北に細長く、横に「紀州御殿」と書き込みのある1番の建物が武道場で、2番が将校集会所である。図4は現在の城跡公園の地図である(6)。これとの比較から、城跡公園北側の出入口を入れて間もない場所、高山右近の銅像が建つ築山の前あたり(図5)にあったことがわかる。移築後の元御金蔵は、戦後の撮影とみられる写真(図6)を見ると、二ヶ所の出入り口と長大な窓がある。壁も土壁には見えず、下見板張りのようであり、全体にかなり改変されているようである(7)。この写真や前記新聞記事から推定すると、柱や梁などの主要な構造部と屋根が再利用され、壁などは新たな用材が使われたと思われる。

戦後、高槻工兵隊の敷地の東半分側は、北側が高槻市立第一中学校となつた。中央部から南側にかけては、大阪市内の校舎を戦災で焼失した大阪外事専門学校(後に大阪外国語大学、現大阪大学外国語学部)が一部移転し、工兵隊の兵舎を校舎として使用した。大阪外国語大学の資料から、この頃は体育室として使用され、建坪が三三坪(一〇九・一㎡)。ちなみに新御金蔵は九三・一一㎡であったことがわかる(8)。昭和三十二年（一九五七）に

大学が大阪市内に統合された後は、第一中学校の校舎や高槻市教育研究所母子寮、市営住宅などが設けられた。この時期に、旧武道場がどのように利用されたかは不明である。

当館には、高槻市及びその前身となった各町村の明治時代〜平成時代初



図4 現在の城跡公園の図3該当部分(縮尺は概算)。

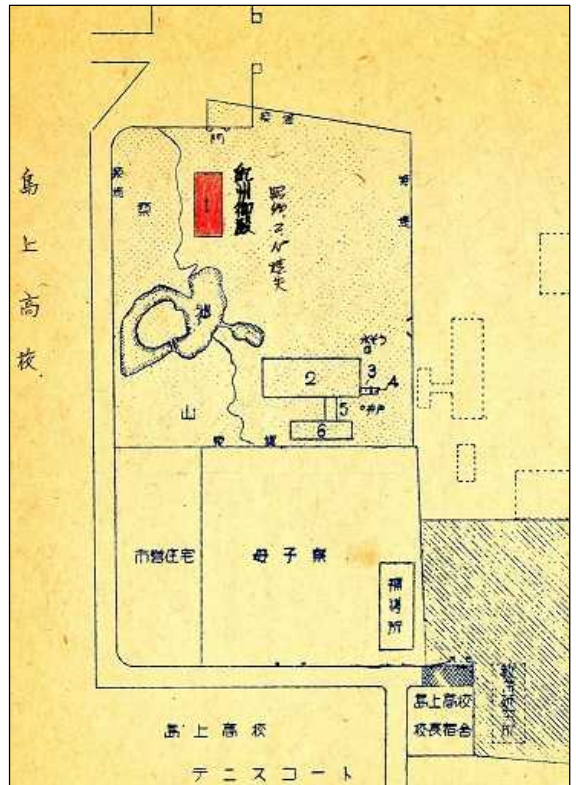


図3 焼失した武道場(紀州御殿)の位置を示した略図(部分)。

期の行政文書が多数保管されており、順次分類、整理作業を行っている。今回、国有地であった大阪外国語大学の高槻校地に関する書類綴りを確認することができた。その中に、昭和四十年(一九六五)四月五日に作成された、旧武道場の焼け跡の整地に関する文書があった。これから、元御金蔵が同年二月十五日に焼失したことが確認できた。図3は同文書に付属する図面である。

### 三 高槻工兵隊の「紀州御殿」伝承について

前掲の文書には、焼失した建物が「紀州御殿」と呼ばれていたことが記されている。高槻工兵隊の将校集会所がある一角は、築山や池がある日本庭園が築かれていて、紀州御殿と呼ばれていた。図3からは、その様子がうかがえる。また、図5の高山右近像が建つ場所は、この時の築山が土台となっている可能性がある。付言すれば、この付近は、高槻城時代に本丸東側の内堀にあった、弁財天の祠が建てられた小島のあたりである(9)。そのため、築山は小島の名残である可能性もある。今後、位置を精査して特定したい。

紀州御殿の名の由来については、高槻市文書課市史編纂係が、市役所の



図5 城跡公園の高山右近像

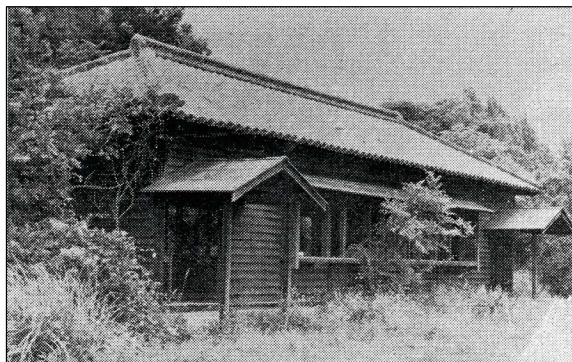


図6 高槻工兵隊の武道場

庁内報『かわらばん』内の地名に関するコラムで取り上げている(10)。これによれば、伝承には①高槻城時代からの遺構、②工兵隊が大阪城にあった紀州御殿を移築したものとする二種類があり、それぞれを検証し、否定している。そして、終戦時に高槻工兵隊で下士官を務めていた市民の証言から、同隊には和歌山県出身者が多く、彼らが郷里の和歌山城の庭園をまねて作庭したもので、建物ではなく庭園を指していたと結んでいる。

しかし今回、元御金蔵が紀州御殿と呼ばれていたことに注目し、名称の由来について私見を述べたい。大阪城の本丸にあった紀州御殿は、明治十八年(一八八五)に和歌山城の二の丸御殿を陸軍が移築し、軍の施設として使用したものである。昭和六年(一九三二)に前記した陸軍第四師団司令部庁舎が竣工した後は、大阪市迎賓館として使用され、それにあわせて日本庭園が作庭された(11)。

大阪城と高槻の紀州御殿を比較すると、規模や建築様式は全く異なるものの、他の城から移築された施設であることと、日本庭園があるなどの共通点がある。そして、高槻工兵隊は大阪城の第四師団に属していることから、交流や親近感があったと思われる。そこで、「我が隊の将校集会所のあたりは、師団司令部の紀州御殿みたいなものだ」、「高槻版の紀州御殿だ」といった認識が変化し、いつしか紀州御殿の名前だけが残ったのではないかと推測している。

なお、城跡公園内には、高槻工兵隊時代の庭園遺構とみられる場所がもう一ヶ所ある。それは公園の南端近く、交通遊園の南側に石を組んで護岸



図7 庭園遺構らしき池の石組

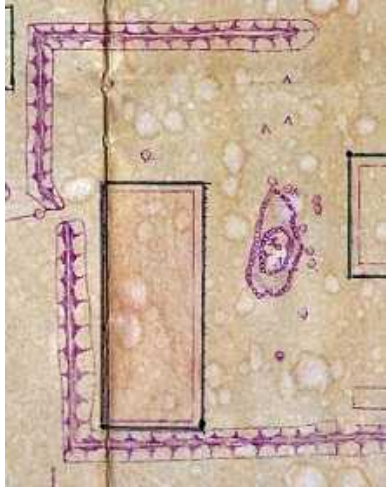


図8 庭園遺構らしき池(中央部)。その左側が下士官集会所

とし、池と中島を築いた場所である(図7)。位置は図4を参照)。石の中には、矢穴を有する城の石垣石と思われるものがいくつかある。この場所は、高槻工兵隊時代の下士官集会所の東隣にあたる。この遺構の図面や写真等は、工兵隊時代の資料では確認できていない。確認できた最も古い資料は図3と同じ、大阪外国語大学の高槻校地に関する書類綴りに含まれていた平面図(部分・図8)である。同校高槻校地は仮住まいとして使用され、新たな施設等の整備は行われていないことから、工兵隊時代に築かれたと判断した。そしてその位置から、下士官集会所に面して設けられた庭園の名残ではないかと推測している(12)。

#### おわりに

本稿では、高槻工兵隊へ移築された大阪城の元御金蔵について、その移築場所や焼失時期を特定した。その過程で、高槻城跡を拠点にしていた高槻工兵隊の敷地やその施設の変遷について、十分に解明されていないことがわかった。今後は、新たな資料の発見とその整理に努め、高槻城跡の土地利用についての研究に資したい。

#### 【注】

- (1) 御金蔵内部の解説板による。
- (2) 『重要文化財大阪城千貫櫓・焰硝蔵・金蔵(附乾櫓)修理工事報告書』(大阪市、一九六一年)より転載した。
- (3) 前掲(2)に同じ。但し、同書では尺で表示されていたものを筆者がmに換算した。
- (4) 大阪文化財研究所が、平成二十五年に実施した当該地点の発掘調査により、元金蔵の雨落溝と建物の地業、車庫のコンクリート基礎が確認された(平成二十五年九月一三日付大阪市報道発表資料)。
- (5) 『高槻市立第一中学校 昭和三十一年度卒業アルバム』(高槻市立第一中学校、一九五六年)より転載した。
- (6) 高槻市HP内の地図、「わが街高槻ガイド」より当該部分を抽出。◆印は筆者加筆。
- (7) 前掲(2)から転載した。
- (8) 『大阪外国語大学 昭和三十七年度』(大阪外国語大学、一九五二年)。
- (9) 弁財天の祠は、現在野見神社(市内野見町)の摂社として境内にあり、小島神社とよばれている。野見神社のHPによれば、明治四十一年(一九〇八)に社地を陸軍に献納し、現在地に遷座した。
- (10) 「紀州御殿」の謎(高槻市庁内報『かわらばん』第64号、65号、一九八〇年)。
- (11) 昭和二十二年(一九四七)、接収中の進駐軍の失火により焼失。
- (12) 現在ある庭園遺構のうち、図8の図面や、石組みの違いから、北半分が工兵隊時代、南半分は城跡公園整備の際に追加で築かれたとみられる。

## 高槻藩士小倉家の昇進について

芦原 義行

はじめに

本稿は、高槻藩士小倉家の昇進の一例を紹介するものである。

江戸時代の武士たちは、生まれた家に応じてそれぞれ「家格」が定められており、自身の昇進を左右した。また、家格はその家で継承されるため、個人の努力で簡単に変えられるものではなかった。その家格差が可視化されたのは、正月など主君に謁見できる儀礼の場であった。家格によって席次や、主君への謁見の可否が決められたのである。親からの家督相続後に就くことのできる役職等も、家格に応じて定められた。

江戸時代の武士の昇進について、藤井讓治氏は一般的に家格や身分に縛られ、極めて閉鎖的なものとする見解に対し、幕臣の昇進の実態は、昇進とそれに伴う加増によって武士のエネルギーを引き出し、幕藩官僚制を生きた運動体たらしめたと述べる<sup>(1)</sup>。

一方、森下徹氏は、萩藩毛利氏家中の役所内における格と職との関係から藩士の昇進を検討し、藩の機構とは「家格や身分に縛られた閉鎖的なものであった」ことにこそ特徴があったとして、藤井氏の見解に疑問を投げかけている<sup>(2)</sup>。高野信治氏は、諸大名の家中の事例を集め、近世を通じて家格・役職・家禄の上昇や没落があり、当時の人々がそのような人事のあり方を現実的なものと考えていたとする<sup>(3)</sup>。このように研究史では、江戸時代の武士たちに、身分制や家格といった制限があるという共通認識がある一方で、家格を越えた昇進は稀だという見解と、近世を通じて役職、家禄の昇降があり家格制度を弾力的に運用していたという見解がある。

さて、「諸役席順」<sup>(4)</sup>という史料から高槻藩の事例を見たい。

- 一、御家老嫡子御近習目附席被／召出事、／但二男方給人
  - 一、御家老格嫡子御近習目附格被／召出事、／但二男方給人格
  - 一、御中老嫡子給人被 召出事、／但二男方無足御小姓
  - 一、御旗奉行方上之間迄嫡子御小姓／被召出候事、／但二男方中小姓
  - 一、給人嫡子中小姓被 召出事、／但二男方徒士(後略)
- 家老の嫡子は近習目附、二男からは給人に召し出され、中老の嫡子は給

人、二男からは無足小姓になり、給人の嫡子は中小姓に、二男からは徒士に召し出されるなど、親の役職や格によって、子の初任職が事細かに定められたことが分かる。

これらは、士分の相続の事例だが、徒士や足軽となると、事情は別である。諸大名家の家中法から徒士層の相続制度を研究した磯田道史氏によると、近世前期に徒士層は、足軽と同じく相続性がなく一代限りであったが、徒士層は次第に世襲化が進んでおり、これは諸藩に共通する動きであったと指摘する。また、高槻藩の延宝二年(一六七四)の御条目より、延宝期の永井家では、父の跡目が子に譲られるのは、給人の惣領に限られており、その下の中小姓は徒士に格下げして子が召し出されたとする。そして、切米取の徒士は相続が原則的には認められていなかったと指摘する<sup>(5)</sup>。士分と徒士、足軽の階層間では、それぞれ相続や昇進の在り方に大きな差異があったのである。

高槻藩の事例については、史料の制約上不明な点が多い。本稿では、最上層の侍層(士分)を取り上げ、中でも、高槻藩において財務を担当した勘定方の役職を歴任した小倉家の役職の履歴や昇進について検討する。

### 一 勘定方・小倉家について

まず、勘定方・小倉家について紹介する。小倉家は代々「藤左衛門」を名乗るが、実名が史料上で現在確認できるのは、貞享期(一六八四〜一六八八)の頼房からである。「頼」を通字とし、頼房以下は、頼貞―頼雄(幼名喜間太)―頼之(幼名小隼、初め衛守、のち東左衛門)―頼郷(初め衛守)―頼匡(初め守之助)―頼禮(藤一郎)と続き、明治を迎える。

慶安二年(一六四九)、高槻藩主永井家の初代直清が、山城国神足館(長岡京市)から高槻城へ入城した。『高槻市史 史料目録』において小倉家は、直清が高槻へ入部した際の記録である「高槻入部御供之次第」に名が見られないため、これ以後の仕官家とする<sup>(6)</sup>。しかし、高槻藩家老・三嶋家ゆかりの仏日寺(池田市)に伝来し、神足館と周辺の武家屋敷地を描いた「城州神足之図」には、「小倉十右衛門」の屋敷が記されている。小倉藤左衛門と同じ一族で、神足館時代から小倉家が直清家臣であった可能性がある。当家は、小姓もしくは中小姓として藩士としての勤務をスタートし、使役や大目付、勘定奉行、先手者頭へと昇進するのが通例だった。

先述したように、江戸時代、藩士たちは生まれた家に定められた家格に応じた役職に就任し、代々継承する場合が多い。当家の場合は、親から家督相続をする場合、給人格・広間番に任命された。その後、役替えを迎える中で勘定奉行を歴任した。家職として継承する中で、勘定方事務に精通したと思われる。以下、関係史料が豊富である頼貞から頼匡まで歴代の小倉家の役職の履歴や昇進を検討したい。

## 二 小倉頼貞・頼雄親子の役職の履歴と相続

元禄十三年(一七〇〇)から寛保二年(一七四二)までの頼貞と頼雄親子の履歴を編年で書き留めた覚書(7)から、頼貞個人の役職の履歴に注目する。頼貞は、元禄十三年に旗本の本多時令・時興親子が四代藩主・直達の元へお預けになった際の番役を勤めた時から藩士としての勤務を始める。『寛政重修諸家譜』によると本多時令は、自身が召し抱えていた女中の不届きな行為によりお預けになったという。

その後の変遷は、宝永四年(一七〇七)三十四歳の時に、使番役、正徳五年(一七一五)四十二歳で大目付、翌六年、江戸勤番中に「惣勘定頭吟味役」に任命され、享保八年(一七二三)には大目付との兼務を命じられる。「惣勘定頭吟味役」の職掌は不明だが、おそらく高槻藩財政の統率役であろう。藩政の中核に関わる役職に任命され、頼貞は昇進を遂げたのである。同時に「江戸勤番在府中惣御勘定頭吟味役兼役被 仰付」という記述から、頼貞は江戸詰め詰りの藩士であったことが分かる。

享保十三年、五十五歳の時には、病気のため役職の辞任を申し出たところ、大目付は免除、勘定奉行は継続を命じられ、「年来骨折相勤」により、者頭格に昇進している。者頭は、配下に足軽組を持ち、交替で高槻城の警備にあたる役職である。また、城内外で火災等が発生した際は、当番の者頭組が本丸や二の丸、三の丸などそれぞれ持ち場に詰めて、配下の足軽組を差配して消火にあたった(8)。

ちなみに頼貞は、元禄十七年(一七〇四)に高槻藩が江戸城の小石川御門(現在の東京都千代田区)の御手伝普請を勤めた際、その一員に加わった。享保七年(一七二二)からは、京都火消役に出動している。京都火消役は、京都の二条城や内裏を火災から守ることが主要な任務で、亀山藩・淀藩・膳所藩・大和郡山藩の京都周辺の四藩が月番で勤めた。四藩の藩主が江戸

詰め詰りの要職に就いた時の補充として、高槻藩と篠山藩が追加されている。

覚書によると頼貞は、享保七年の九月と十月、翌八年の二月と八月、翌九年の八月、翌十年の三月、翌十一年の七月に出動したことが分かる。以上、幕府から藩へ命じられた役に従事した事例を紹介した。

息子の頼雄は、享保十年、二十二歳で中小姓として勤め始めている。同十四年に父頼貞が五十六歳で没し、同年六月に跡目相続(先代の死去にともなう相続をしている。家禄一三〇石の内、一二〇石を相続し、給人格・広間番に任じられた。家禄全てを相続していない理由は、父頼貞が役職に任じられた際に、「役料」として十石を給付されたためだと考えられる。

享保八年(一七二三)に幕府は、薄禄の者に対して在職中に「役料」を支給する「足高の制」を導入した。この制度では、各役職の定められた職禄以下の家禄の当主に対して、家禄との差額分を「役料」として在職中のみ支給した(9)。つまり、家督相続などで役職を離れると、役料は支給されない。頼雄が全額を相続できなかったのは、高槻藩においても足高の制が導入されたためだと考える。

頼雄の役職の変遷は、寛保二年(一七四二)に使番(10)、寛延元年(一七四八)に大目付(11)、宝暦七年(一七五七)七月に勘定奉行(12)、同年九月には先手者頭を加役されて兼務している(13)。父とほぼ同じ役職を歴任しており、家職化していたことが窺える。勘定奉行の任命状(図1)には、「勝手向難渋之節<sup>三</sup>候間、為宜様<sup>二</sup>念入可致取計<sup>一</sup>」(14)とあり、藩の財政が苦しい状況であるから、入念に職務に励むよう命じられている。宝暦七年前後の藩を取巻く様子を見ると、前年に高槻藩の江戸上屋敷で火災が発生し、翌年

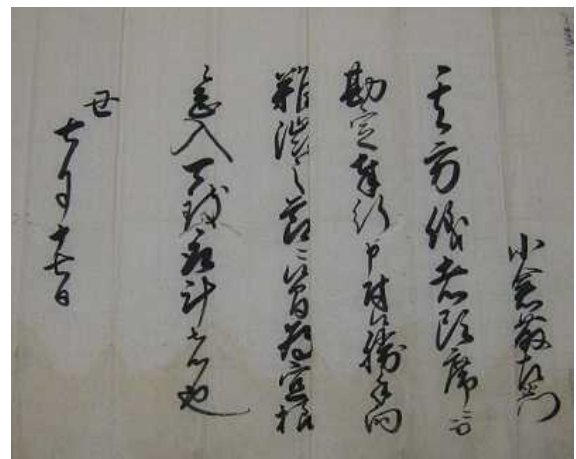


図1 小倉頼雄の勘定奉行への任命状  
「小倉頼雄勘定奉行任命状」(小倉家文書 79)

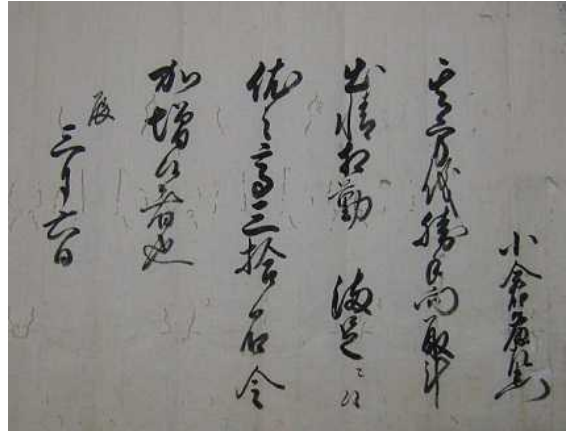


図2 「小倉頼雄加増宛行状」(小倉家文書 81)

には七代藩主直行が四月に病没し、同六月に藩主が八代直珍へ交替するという、出費の絶えない時期であった(15)。「勝手向難渋」の理由もうなずける。

そして宝暦十年には、「勝手向取斗出精相勤満足」(16)、つまり高槻藩の財務での働きを認められ、三〇石を加増されている(図2)。頼雄が、財務においてどのような功績を残したのかは不明だが、藩からの信頼の高さを窺い知ることができる。

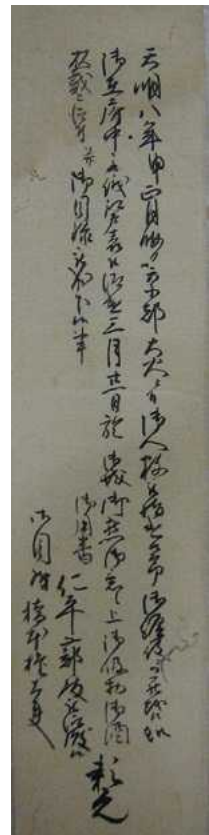
ちなみに、高槻藩の役に従事した例では、享保十七年(一七三二)に六代藩主直期が、般舟院(京都市上京区)で執行された霊元天皇の法要の奉行を勤めた際、番所の警備を勤めた。同じく元文二年(一七三七)には、中御門天皇の法要の警護役を担っている。般舟院は、天皇家の法要を執行行う寺院であったが、その警護役を高槻藩と亀山藩が担った。

頼雄は明和六年(一七六九)に六十六歳で没し、子の頼之(幼名小隼)が跡目相続するが、この時は一五〇石を相続し、広間番に任命されている(17)。父頼雄の代に「勝手向取斗出精相勤満足」として加増された三〇石は、役料としてではなく家禄に加算され、そのまま子へ相続されたことが分かる。

### 三 小倉頼之・頼郷親子の加増と昇進

頼之の役職の変遷に注目すると、天明五年(一七八五)に使役(18)、寛政七年(一七九五)に大目付(19)、翌年、町奉行に任命されている(20)。同十二年には役料として十五石を加増されて計一六五石となり(21)、文化四年(一八〇七)には先手者頭に任命されて五石の加増を受け(22)、計一七〇石となっている。頼之の経歴に注目すると、父頼雄とほぼ同じ役職を歴任し、順当に昇進したことが窺える。

図3 「小倉頼之京都大火の節御纏役につき褒美目録」の端裏書(小倉家文書9)



ところで、天明八年(一七八八)に、御所や二条城の焼失をはじめとする大きな被害をもたらした京都大火が発生した。二章で述べたように、高槻藩は京都火消役を担っており、天明の大火の際は高槻藩士たちも消火活動のために出動している。その際に頼之は、「纏役」として出動している。

職掌は不明だが、消火道具の纏を掲げる役割だと考えられる。後に纏役の褒美として、金五〇〇疋を授かっている(図3)(23)。

頼之の代には、町奉行の役料十五石と、先手者頭の役料五石の計二〇石の加増を受けた。ところが、子の頼郷(幼名衛守)の跡目相続に注目すると、一七〇石全てを相続している。つまり、頼之の代に役料として支給された禄が、家禄に繰り入れられて相続されたことになる。小倉家の場合、代々江戸詰めを命じられており、国元を離れた遠国での職務になるため、出費の多さなどから役料を相続したとも考えられる。

さて頼郷は、小倉家の中で大きな昇進を遂げた一人である。文化五年(一八〇八)に跡目相続し(24)、同十二年に使役(25)、同十四年に大目付(26)、文政六年(一八二二)に先手者頭(27)、同八年に郡奉行と勘定奉行の兼務を命じられている(28)。藩の要職を兼任しており、藩からの期待の高さを窺わせる。翌年からは、高槻藩預地の「御取箇済」(年貢徴収に関する業務)に伴い銀七枚を毎年支給されている。

通常、天領(幕府の直轄領)の支配は代官が担ったが、江戸時代の後期になると、代官の減少とともに近隣の大名へ預けられた(預地・預所)。高槻藩の場合、九代藩主直進の代の寛政元年(一七八九)に、摂津・河内両国の天領一万四〇〇〇石を預かっている。その内、文化六年(一八〇九)については、摂津国では西成・島上・島下・豊島の四郡、河内国では茨田・洪川・若江・讚良・丹南の五郡の内において、五万九八九石一三合四夕七才を預かっている(29)。預地は、藩主が交替しても継承し、天保十四年(一八四

三)に一旦天領に復するが、同年末に預地に復し、そのまま幕末に至っている。頼郷が、どこの地域の預地を担当したのかは不明だが、郡奉行の職掌に預地支配、特に年貢徴収に関する業務が含まれていたことが判明する。そして頼郷は、文政十二年(一八二九)、藩政の奥向きの事務を統括する「用人」への昇進を遂げている(30)。高槻領内に関する職務のみならず、預地支配も任せられており、藩からの期待の大きさを窺わせる。

頼郷は、天保五年(一八三四)に没して、子の頼匡(守之助)が家禄一七〇石を相続した(31)。その後の経歴は、天保九年に使役(32)、同十二年に先手者頭(33)、安政三年(一八五六)には用人に任じられている(34)。そして、慶応元年(一八六五)に中老格に昇進した(35)。「格」であり、家老の補佐役である「中老」に就任したわけではないが、席次では、家老・家老格・中老に次ぐ地位にまで昇進した。

### おわりに

以上、頼貞から頼匡まで小倉家五代にわたって彼らの役職の履歴や昇進について紹介した。彼らの履歴に注目すると、同じ役職を歴任しており、一定の昇進コースがあったことが窺えた。この背景には、就任可能な役職を規定する「家格」の存在が大きいと思われる。しかし、小倉家のように勘定方という藩の要職を歴任することで、勘定方の役職を家職として継承し、財務に関する知識や技能を代々受け継いだと考えることができる。幕府は、享保八年に制定した足高の制に見られるように、武士の家格や家柄によって役職を規定するのではなく、役務上で必要な経費を補填するために役料を支給し、個人の能力によって昇進する道が開かれる政策も実行した。

小倉家も藩から役料を支給される対象であったが、役料が家禄に合算されてベースアップが図られた事例である。小倉家は、勘定方として長年の精勤や奉公を藩から認められて、頼郷の代に用人へ昇進し、子の頼匡の代には中老格への上昇を遂げた。幕末という時代性も考慮する必要があると思われるが、勘定方という藩政において重要な役職を代々担い、藩からの信頼も厚かった。また勘定方のみならず、頼郷は郡奉行として預地支配に携わるなど、その職務は多岐にわたっていた。このような点も昇進の背景にあると思われる。

今回は、他の藩士家を検討していないため、小倉家のような出世が高槻藩において一般的であったのかは不明である。今後とも関係史料の収集や解析に務めたい。

### 【註】

- (1) 藤井讓治『江戸時代の官僚制』(青木書店、一九九九年)。
- (2) 森下徹『武士という身分 城下町萩の大名家臣団』(『歴史文化ライブラリー三四七』、吉川弘文館、二〇一二年)。
- (3) 高野信治『武士の奉公 本音と建前 江戸時代の出世と処世術』(『歴史文化ライブラリー三九三』、吉川弘文館、二〇一四年)。
- (4) 「諸役席順」当館蔵。
- (5) 磯田道史「武士層の相続制度」(『史学』第七〇巻、第一号、二〇〇〇年)。
- (6) 『高槻市史 史料目録 第二十号』(高槻市史編さん委員会編、一九九八年)。
- (7) 「小倉家勤仕履歴覚」(小倉家文書七七)。
- (8) 「御広間番張紙覚」(三嶋家文書五六)。
- (9) 『国史大辞典』(「足高の制」の項、吉川弘文館、一九八八年)。
- (10) 「小倉藤左衛門頼雄使番任命状」(小倉家文書七六)。
- (11) 「小倉藤左衛門頼雄大目付役任命状」(小倉家文書七八)。
- (12) 「小倉藤左衛門頼雄勘定奉行任命状」(小倉家文書七九)。
- (13) 「小倉藤左衛門頼雄先手者頭・勘定奉行加役任命状」(小倉家文書八〇)。
- (14) 前掲註(12)。
- (15) 「高槻年代記」(小澤家文書三八)。
- (16) 「小倉藤左衛門頼雄加増宛行状」(小倉家文書八一)。
- (17) 「小倉小隼頼之亡父藤左衛門家督宛行状」(小倉家文書八二)。
- (18) 「小倉衛守(頼之)使役任命状」(小倉家文書八三)。
- (19) 「小倉東左衛門頼之大目付任命状」(小倉家文書八四)。
- (20) 「小倉東左衛門頼之町奉行任命状」(小倉家文書八五)。
- (21) 「小倉東左衛門頼之役料宛行状」(小倉家文書八六)。
- (22) 「小倉東左衛門頼之先手者頭任命状」(小倉家文書八七)。
- (23) 「小倉頼之京都大火の節御纏役につき褒美目録」(小倉家文書九)。
- (24) 「小倉衛守(頼郷)亡父東左衛門家督宛行状」(小倉家文書八八)。
- (25) 「小倉藤左衛門頼郷使役任命状」(小倉家文書八九)。
- (26) 「小倉藤左衛門頼郷大目付役任命状」(小倉家文書九〇)。
- (27) 「小倉藤左衛門頼郷先手者頭任命状」(小倉家文書九一)。
- (28) 「小倉藤左衛門頼郷郡奉行・勘定奉行加役任命状」(小倉家文書九二)。
- (29) 「尼崎市史」(第二巻、一九六八年、二九〇頁)。
- (30) 「小倉藤左衛門頼郷用人役任命状」(小倉家文書九三)。
- (31) 「小倉守之助頼匡亡父藤左衛門家督相続状」(小倉家文書九四)。
- (32) 「小倉守之助頼匡使役任命状」(小倉家文書九五)。
- (33) 「小倉藤左衛門頼匡先手者頭任命状」(小倉家文書九六)。
- (34) 「小倉藤左衛門頼匡用人役任命状」(小倉家文書九七)。
- (35) 「小倉藤左衛門頼匡中老格申渡状」(小倉家文書九八)。



## 史料紹介 「高槻町役場新庁舎完成記念宣伝ビラ」について

「宣伝ビラから読み取る「大高槻町」時代の高槻」

中村 雄一

### 一 はじめに

現在の高槻市役所庁舎本館は、昭和四十六年（一九七二）一月二十五日より供用されている（1）。それ以前の高槻市役所庁舎（以下庁舎とする）は、現在のJR高槻駅南口駅前広場の位置に所在していた（図1）。



図1 竣工直後の高槻町役場新庁舎  
（『第一回町会史』より）

昭和六年（一九三一）一月一日、高槻町と芥川町、磐手村、大冠村、清水村の五町村が合併、いわゆる「大高槻町」が発足した。これに伴い、現在の大手町にあったそれまでの高槻町役場庁舎が手狭になり、移転改築の必要が生じたため、昭和八年（一九三三）八月十五日起工、翌昭和九年（一九三四）四月十六日より供用されたのが先述の庁舎である（2）。

庁舎は大林組の施工による鉄筋コンクリート造り三階建て、延べ三六八・〇六四坪の建物で（3）、当初は高槻町役場として、そして昭和十八年（一九四三）一月一日の高槻市制施行以降は高槻市役所として、実に三十七年の長きに亘り使用されることになった。

当館には、高槻市及びその前身となった各町村の明治時代～平成時代初期の行政文書が多数保管されており、順次分類、整理作業を行っているところであるが、このほど昭和八年（一九三三）同九年（一九三四）にかけて行われた庁舎の建設工事に関する資料を綴った簿冊「昭和八年七月 町役場建築一件書類」（図2）が確認されたので、今回はそのなかに残されていた「高槻町役場新庁舎完成記念宣伝ビラ」について紹介したい。

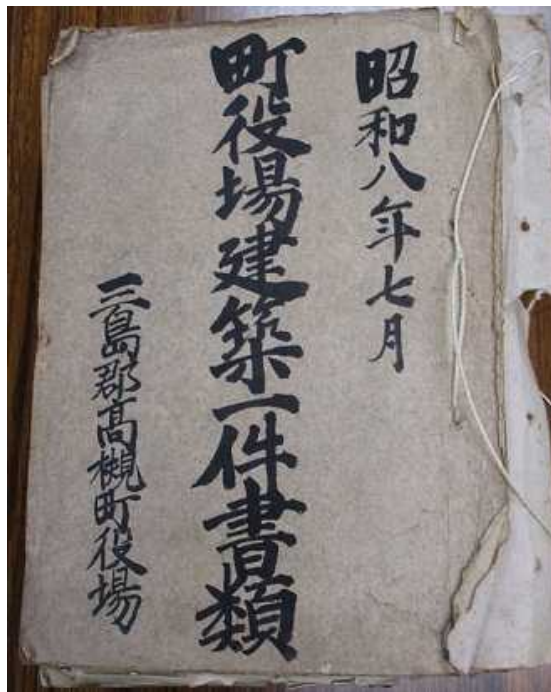


図2 『昭和八年七月 町役場建築一件書類』  
（表紙。当館蔵）（縦 27.4cm×横 19.5cm×厚さ 7cm）

### 二 「高槻町役場新庁舎完成記念宣伝ビラ」について

昭和九年（一九三四）四月七日、庁舎において落成式が華々しく挙行された。この際に高槻町作成のビラが配布されていたことがわかっている。これよりさかのぼること三年前の昭和六年（一九三一）四月二十五日、省線（現在のJR）高槻駅前の広場で五ヶ町村合併高槻町結成祝賀会が開催されており、この際にも高槻町作成の宣伝ビラ計五種類が、大阪毎日新聞社機により空中から撒布された（4）。今回紹介するビラについても、五ヶ町村合併高槻町結成祝賀会の際に撒布されたものとは若干文言が異なっているものの、落成式当日に祝賀飛行を行った大阪毎日新聞社機から撒布されたものとみられる。

落成式において配布されたビラは、全部で五種類が存在し、縦一八・

八cm×横一一・九cmで五色に色分けされている。以下、順番に記載内容を紹介する。

○ビラその1(図3)  
計五種類五枚のビラのうち、最初に綴じられていたのが、図3の緑色のビラである。当時としては近代的な鉄筋コンクリート造りの庁舎が、装いも新たに省線高槻駅前に完成したことを華々しく称えている。

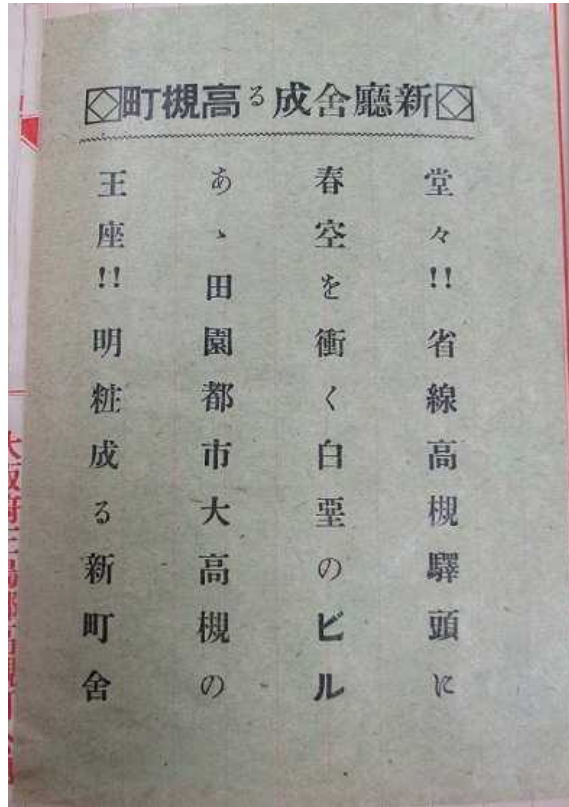


図3 ビラその1「新廳舎成る高槻町」(当館蔵)

□新廳舎成る高槻町□  
堂々!! 省線高槻驛頭に  
春空を衝く白堊のビル  
あゝ田園都市大高槻の  
王座!! 明粧成る新庁舎 (緑色)

○ビラその2(図4)

図4のビラはピンク色の紙に刷られたもので、「大高槻町」の恵まれた自然環境を謳っている。三行目にある「十勝八景」とは、昭和六年(一九三二)に選定された「高槻十勝」・「高槻八景」を指している。

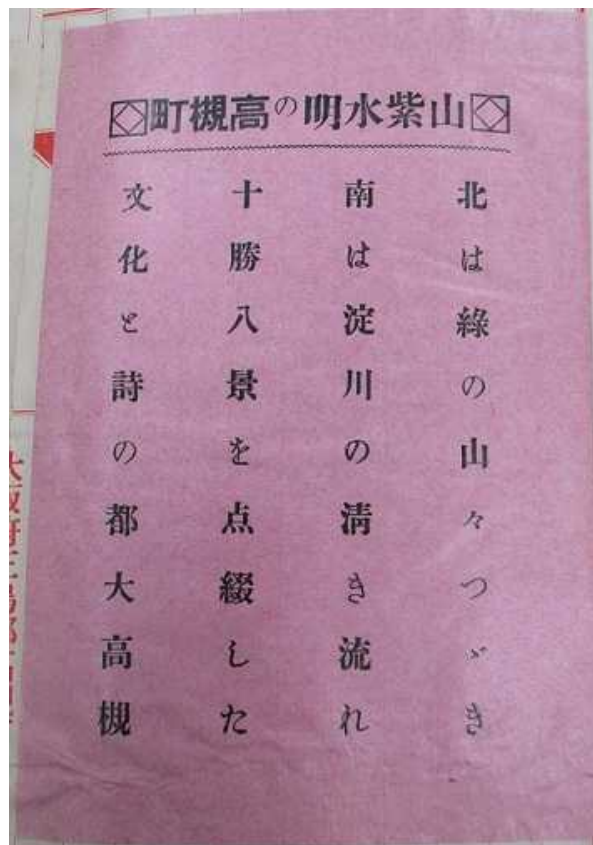


図4 ビラその2「山紫水明の高槻町」(当館蔵)

□山紫水明の高槻町□  
北は緑の山々つゞき  
南は淀川の清き流れ  
十勝八景を点綴した  
文化と詩の都大高槻 (ピンク色)

○ビラその3(図5)

図5のビラは茶色の紙に印刷されたもので、新生「大高槻町」の周囲が十五里に及ぶこと、陸軍工兵第四大隊、京都帝国大学農学部附属農場現京都大学大学院農学研究科附属農場、京都帝国大学化学研究所(昭和四十三年「一九六八」に宇治市に移転(5))、その他大企業の事業所や工場が数多く立地し、活況を呈する「大高槻町」の様子を謳っている。

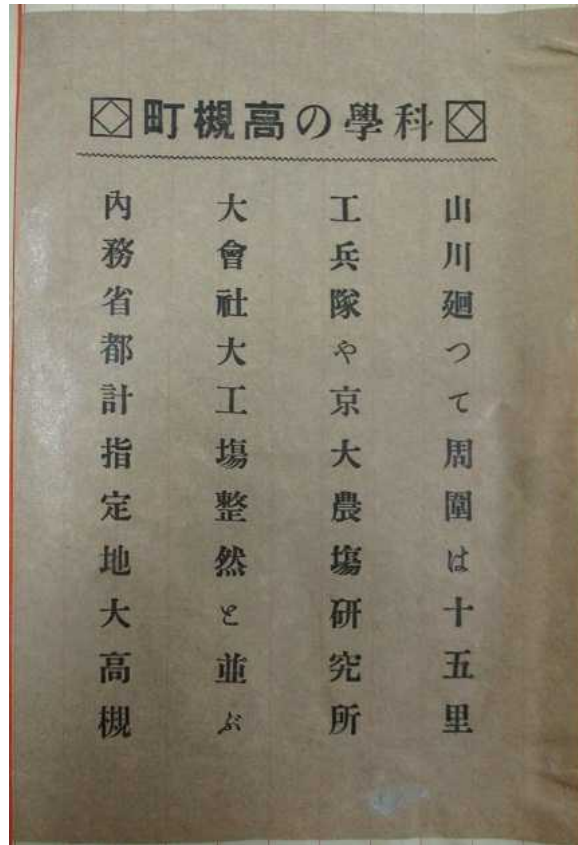


図5 ビラその3「科學の高槻町」(当館蔵)

□科學の高槻町□

山川廻つて周圍は十五里

工兵隊や京大農場研究所

大會社大工場整然と並ぶ

内務省都計指定地大高槻 (茶色)

○ビラその4(図6)

図6のビラでは、高槻町には省線(現JR東海道本線と京阪電気鉄道新京阪線)現阪急電鉄京都本線)計二本の鉄道が通っており、同町が交通至便の地であることが謳われている。

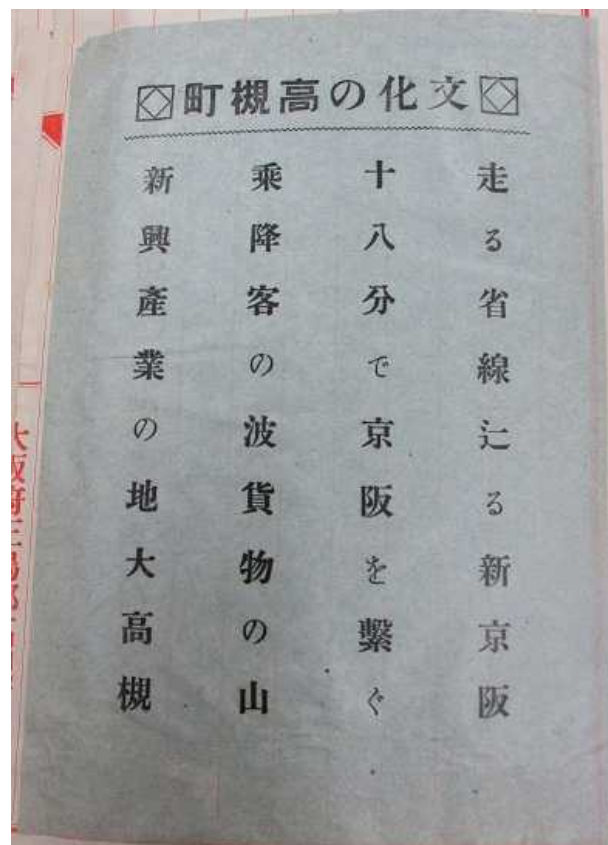


図6 ビラその4「文化の高槻町」(当館蔵)

□文化の高槻町□

走る省線(新)京阪

十八分で京阪を繋ぐ

乗降客の波貨物の山

新興産業の地大高槻 (青色)

○ビラその5(図7)

図7のビラでは、高槻町が昭和六年(一九三二)一月一日の五ヶ町村合併から丸四年目を迎えたこと、また同町がいかに住環境面で優れた土地であるかがアピールされている。ある意味では、現在の施政方針に掲げられているフレーズ「住みやすさナンバーワンのまち」に通じるところのあるビラである。

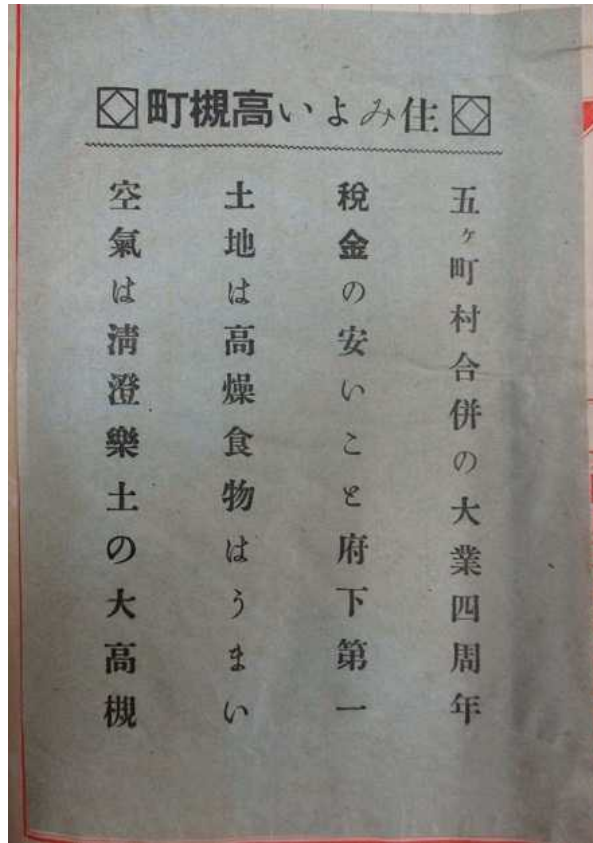


図7 ビラその5「住みよい高槻町」(当館蔵)

□住みよい高槻町□

五ヶ町村合併の大業四周年

税金の安いこと府下第一

土地は高燥食物はうまい

空気は清澄樂土の大高槻 (青色)

### 三 「高槻町役場新庁舎完成記念宣伝ビラ」に関する考察

本項では、前項で紹介した宣伝ビラに記載された、いくつかの事柄について、歴史的事実の観点から考察を加える。

図4のビラにある「高槻十勝」とは、昭和六年(一九三二)に高槻町内に所在する名勝旧跡の保存と広報、啓発活動を目的に発足した高槻保勝会が同六月三日の創立総会の際に選定した十ヶ所の景勝地を指すもので、磐手杜神社、金龍寺、天狗の滝(岩滝)、花の井、京都帝国大学農学部附属古曽部園芸場(現京都大学大学院農学研究科附属農場古曽部温室)、伊勢寺、松林庵、高槻城址、安岡寺、今城塚古墳が選定されている(6)。

一方の「高槻八景」とは、同年四月二十四日から二十六日まで開催された高槻町結成祝賀会の場において、「大高槻町」の発足を永久に記念するため、北摂写真研究会会員が撮影した高槻町内各地の名勝・風景のなかから、礪村彌右衛門町長、中井啓吉助役、吉田栄三郎助役他の関係者による審査を経て選定されたものである。選定されたのは、上宮天満宮、芥川堤、摂津耶馬溪(摂津峽)、能因塚、本山寺、神峯山寺、淀川、八丁松原の計八ヶ所である(7)。

これらの景勝地は、いずれも高槻町の将来の発展に資することを願って選ばれたものである。なかでも、「高槻八景」に選ばれた摂津耶馬溪は、昭和三年(一九二八)の新京阪鉄道の開業以降、沿線近郊の景勝地として宣伝されており、その後昭和十三年(一九三八)には大阪府の名勝に指定された。現在に至るまで高槻を代表する景勝地として、市内外の多くの人々から親しまれている(図8)(8)。

図5のビラに取り上げられた陸軍工兵第四大隊(昭和十一年「一九三六」に陸軍工兵第四連隊へ、昭和二十年「一九四五」に大阪師管区工兵補充隊へ改称)については、高槻町を挙げての熱心な誘致運動の結果、明治四十二年(一九〇九)三月より町から寄附を受けた高槻城址の土地に駐留するようになったものである。

同隊はその後、日中戦争、太平洋戦争といった戦争に出兵する傍ら、昭和九年(一九三四)に発生した室戸台風をはじめとする風水害の際に救援活動を行ったり、高槻尋常小学校でのプール建設をはじめとする土木作業に従事するなど、さまざまな形で地域貢献を行った。昭和二十年(一九四五)の敗戦後、同隊の用地と施設については高槻市に払い下げられ、現在は城



図9 京都帝国大学農学部附属農場

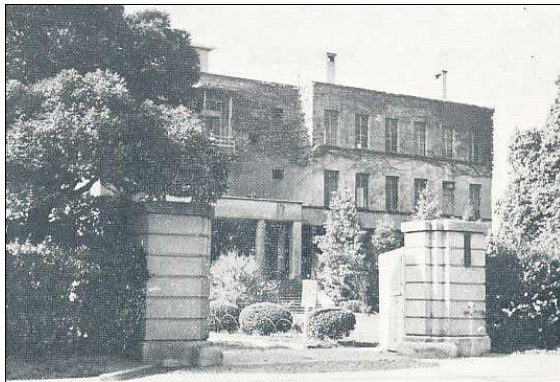


図10 京都帝国大学化学研究所

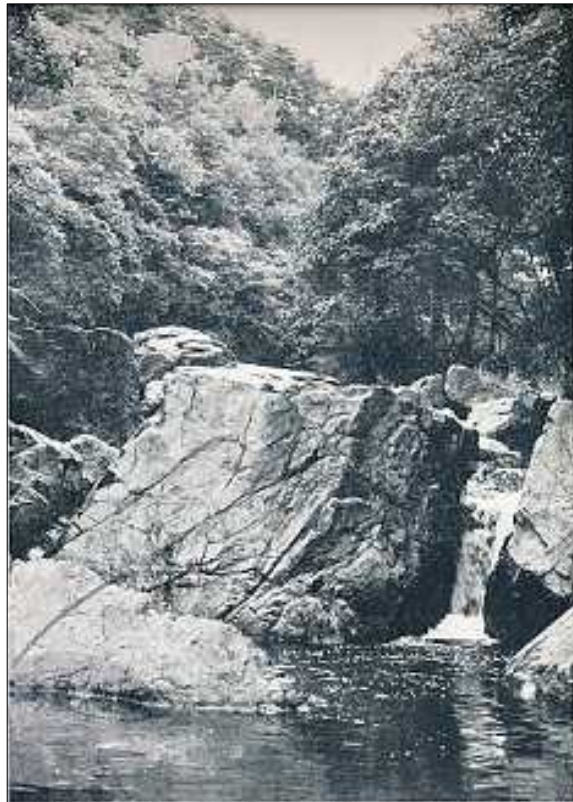


図8 摂津耶馬溪(摂津峡)

(図8~10は共に『市勢要覧 1963年版 市制20周年記念』より)

跡公園、第一中学校、槻の木高等学校、しろあと歴史館、高槻現代劇場と  
いった公共施設が建てられている(9)。

また、京都帝国大学農学部附属農場(図9)については「高槻町」発足直前の昭和三年(一九二八)に、同大学化学研究所(図10)については昭和四年(一九二九)にそれぞれ完成したばかりであった。

当館が所蔵している高槻町の「昭和八年事務報告書」によると、昭和八年(一九三三)十一月三十一日現在、高槻町には湯浅蓄電池製造株式会社、高槻絹糸株式会社、第一製菓株式会社などの企業の工場が立地しており、年々工業化が進展していたことが伺える。

続く図6のビラは鉄道路線について触れているが、このうち省線の高槻駅は明治九年(一八七六)七月二十六日の大阪〜向日間鉄道開業とともに設置されたものである(10)。すでに昭和九年(一九三四)時点で、省線の神戸〜京都間のうち、神戸〜梅小路(現京都貨物)間については複々線となっていた。なお、高槻駅を含む省線の吹田〜京都間が電化されたのは三年後の昭和十二年(一九三七)十月十日、神戸〜京都間の複々線化が完了したのは翌昭和十三年(一九三八)十二月一日のことである(11)。

一方、新京阪線は昭和三年(一九二八)一月十六日に新京阪鉄道の手により淡路〜高槻町(現高槻市)間が開業、同年十一月一日には昭和天皇の御大典に合わせ高槻町〜京都西院(仮)間が延伸されたばかりであった(12)。開業当初の高槻町駅には普通電車のみが停車し、超特急電車、急行電車は通過していたが、当時の磯村彌右衛門町長が新京阪鉄道(昭和五年(一九三〇)九月十五日に京阪電気鉄道に吸収合併)と再三交渉を行った結果、昭和六年(一九三二)年八月より急行電車が高槻町駅に停車するようになった(13)。

新京阪線の開業以降、高槻町駅付近には大阪高等医学専門学校(現大阪医科大学・図11)や三島病院(現大阪医科大学附属病院)、京都帝国大学化学研究所などが相次いで建設された。また、新京阪鉄道の経営による住宅地も開発され、同駅周辺は活況を呈するようになった。このように、昭和初期に省線、新京阪線といった鉄道路線の整備が進んだことが、その後の高槻町、高槻市の発展の一つの大きな要因となっている。

最後の図7のビラの二行目にある「税金の安いこと府下第一」のフレーズについて補足すると、昭和六年(一九三一)の五ヶ町村合併により、それまで二十五円四十六銭一厘だった旧五町村の一戸当たりの町村税について、十六円九十九銭一厘への大幅な引き下げが実現している。

また、一戸当たり平均十一円強だった戸数割税の負担額は、それまでの

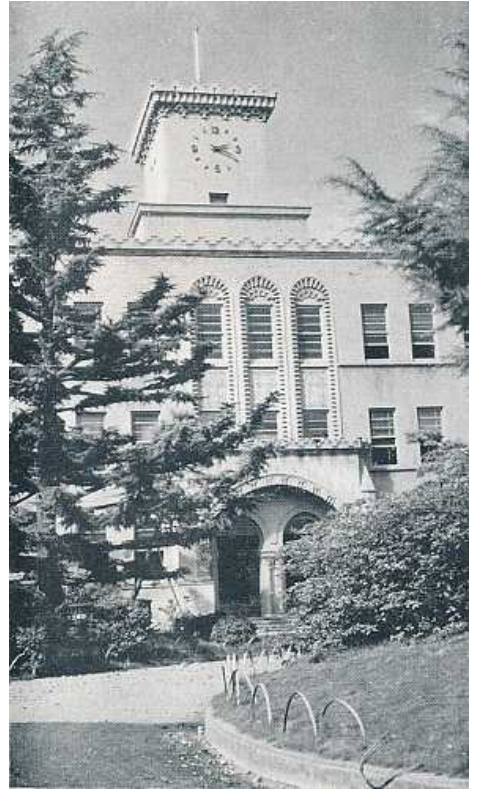


図 11 大阪高等医学専門学校  
 (『市勢要覧 1963 年版 市制  
 20 周年記念』より)

半額以内に引き下げられている(14)。

#### 四 おわりに

本稿では、当館で保管している明治く平成時代初期の近現代行政文書の分類、整理作業のなかで発見された資料のなかから一部を紹介した。今回調査した「昭和八年七月 町役場建築一件書類」の簿冊の中には、宣伝ビラのほかにも庁舎の図面一式、庁舎落成式の招待者一覧や祝辞といった数多くの貴重な資料が残されていた。

今後も引き続き、昭和六年(一九三二)の五ヶ町村合併や昭和九年(一九三四)の庁舎完成、及びその前後に現高槻市域で起きた諸々の出来事について、前述の近現代行政文書のほか、当館や市立図書館が所蔵している郷土資料をもとに、さらなる調査を継続したい。

#### 【註】

- (1) 山中永之佑「新市庁舎の建設」(『高槻市史』第二巻本編Ⅱ、一九八四年)。
- (2) 『高槻町役場建築二関スル記録』(昭和八年二月二十七日く昭和九年四月十六日) 大阪府 三島郡高槻町役場。
- (3) 『工事報告』高槻町助役 吉田栄三郎(昭和九年四月七日)。
- (4) 山中永之佑「高槻町結成祝賀会」(『高槻市史』第二巻本編Ⅱ、一九八四年)。

- (5) 京都大学化学研究所ホームページによる。
- (6) 赤松吉雄編『高槻町全誌』第十三編 文芸篇(一九三三年)。
- (7) 註6文献。
- (8) 西本幸嗣「付録解説 高槻名所廻りとパノラマ地図」(『大阪春秋』平成二十三年夏号、新風書房、二〇一一年)。
- (9) 細尾幸作「昭和期の工兵隊」(『高槻市史』第二巻本編Ⅱ、一九八四年)。
- (10) JTB『停車場変遷大事典 国鉄・JR編2』(一九九八年)。
- (11) 日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史 年表』復刻版(一九九七年)。
- (12) 阪急阪神ホールディングス株式会社グループ経営企画部(広報担当)編『100年のあゆみ 通史』(二〇〇八年)。
- (13) 赤松吉雄編『高槻町全誌』第九編 交通篇(一九三三年)。
- (14) 『昭和六年事務報告書』高槻町。

発行日 二〇一五年十月三日 編集・発行 高槻市立しろあと歴史館

大阪府高槻市城内町一番七号・TEL 〇七二(六七三)三九八七

◆ホームページ：高槻市ホームページ「インターネット歴史館」内で掲載

http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi\_kanko/rekishi/rekishikan/chosa/shiroato/shiroato\_dayori/index.html